

# 「石丸繁子書道展」作品目録

平成26年11月23日(日)～11月29日(土) 子規記念博物館

タイトル：『虚子の眼』—明治・大正・昭和を羽ばたいた虚子の世界

## 子規記念博物館八回展 — コンセプト

愛媛の俳人に執着して十四年目。ようやく、「虚子の眼」に辿り着いた。

虚子の職業は、出版業者・小説家・俳人。

この三つの顔は、作家的稟質によって、次々と新風を巻き起こすのである。

大きく見開いた「虚子の眼」は、時代の動向を的確に捉え、独自の旗幟を翻すことになる。

それが、俳句観「花鳥諷詠」の提唱である。

私は、その虚子の姿に魅了され、制作意欲を増幅させていった。

虚子は、十七音を響かせながら、大きな力で私の「心のスイッチ」を押してくれた。

## 新聞「日本」文芸欄に初登場

酒もすき餅もすきなり今朝の春

明治26年

季語「今朝の春」

季節「新年」

## 俳壇デビュー

能のある東雲様や花曇

明治29年

季語「花曇」

季節「春」

松蟲に戀しき人の書齋かな

明治29年

季語「松蟲」

季節「秋」

鶏の空時つくる野分かな

明治29年

季語「野分」

季節「秋」

蝶々のもの食ふ音の静かさよ

明治30年

季語「蝶」

季節「春」

もたれあひて倒れずにある雛かな

明治30年

季語「雛」

季節「春」

## 雑誌「ホトトギス」主宰

薔薇呉れて聖書かしたる女かな

明治32年

季語「薔薇」

季節「夏」

遠山に日の當りたる枯野かな

明治33年

季語「枯野」

季節「冬」

打水に暫く藤の雫かな

明治34年5月17日 新聞「日本」に掲載

季語「打水」

季節「夏」

と言ひて鼻かむ僧の夜寒かな

明治37年

季語「夜寒」

季節「冬」

我子早やいろはかるたを取るやうに

明治37年

季語「かるた」

季節「新年」

## 俳壇復帰「守旧派」を宣言

春風や闘志いだきて丘に立つ

大正2年

季語「春風」

季節「春」

大寺を包みてわめく木の芽かな

大正2年

季語「木の芽」

季節「春」

鎌倉を驚かしたる餘寒あり

大正3年

季語「餘寒」

季節「春」

時ものを解決するや春を待つ

大正3年

季語「春待つ」

季節「冬」

## 丸ノ内の丸ビルへ「ホトトギス」発行所を移転

月の友三人を追ふ一人かな

大正12年

季語「月」

季節「秋」

## 「花鳥諷詠」論を提唱

東山静かに羽子の舞ひ落ちぬ

昭和2年

季語「羽子」

季節「新年」

咲き満ちてこぼるる花もなかりけり

昭和3年

季語「花」

季節「春」

※表 記・・・「虚子全集(毎日新聞社)」・「自選自筆 虚子百句(岩波書店)」・「高濱虚子(愛媛新聞社)」